

哲学専攻 専攻 _____ 領域（博士前期/修士・博士後期・前後期共通）

試験科目：第 1 外国語（英語） / 専門科目（ ）

試験時間：（ 60 ）分

解答例

- 問1 The learned（学識ある人々）も the conversable（会話する人々）も高尚な人間たちだが、the learnedは、時間と意志の強さを必要とする高度で困難な精神の働きをする人々で、長期間の準備と勤勉がなければ完成に近づけない人々であるのに対して、the conversableは社交性や趣味があり、知性の平易で柔軟な行使をし、普通の人間を取り巻く諸事情を考察し、身の回りの物事の良し悪しを観察する人々である。
- 問2 というのも、ときには歴史、詩学、政治、そして少なくとも比較的平明な哲学の原理に頼らないで、理性的な生物を楽しませるのに適した会話の主題を見出すことは可能だろうか？
- 問3 会話をする人々の世界が学識と切り離されていることが最近の時代の大きな欠陥であるのと同じように、学識が専門機関に閉じこもり、世界や人間から切り離されていることも大きな欠点である、ということ。
- 問4 学識ある人々の世界と会話する人々の世界を国家に準え、自分がある種の駐在員ないし外交官となって、孤立した両者の間の交流を促したい、ということ。
- 問5 I understand academics under the phrase "the learned" and educated citizens under "the conversable". I believe that it is very important to have some people who connect the world of academics and the world of educated citizens, not only for the time of this essay but also for today. We may well call them, as the author does, "a resident" or "an ambassador", or even "interpreter" or "mediator". As the world of learning is much more complicated today, the work of connecting both worlds must be more difficult but it is even more important. In my view, it is philosophers who are the most suitable for doing that work.

哲学専攻 専攻 領域（博士前期/修士・博士後期・前後期共通）

試験科目：第 2 外国語（日本語） / 専門科目（ ）

試験時間：（ 60 ）分

【出題の狙い】

比較的短く、かつ特殊な用語・術^語の使われていない古典的哲学文献の日本語訳を題材にして、受験者の（1）日本語理解力、及び（2）表現力を診るための問題である。

解答は二問とも記述式のため、唯一特定の「正解」はない。

哲学 専攻 領域（博士前期/修士・博士後期・前後期共通）

試験科目：第 2 外国語（フランス語）

試験時間：（ 60 ）分

【1】

【2】

【3】

哲学専攻 専攻 領域(博士前期/修士・博士後期・前後期共通)

試験科目：第 2 外国語 (ギリシア語) / 専門科目 ()

試験時間： (60) 分

1

「さてそれを言っても、多くの人々はおそらく信じてはくれまいが」と彼は言った。「いいかね、ソクラテス、それはこういうことなのだ。人は、やがて自分が死ななければならぬと思うようになる、以前は何でもなかったような事柄について、恐れや気づかひが心に忍びこんでくる。たとえばハデス(冥界)のことについて言われている物語、——この世で不正をおかした者はあの世で罰を受けなければならないといった物語なども、それまでは笑ってすませているのに、いまや、もしかしてほんとうではないかと彼の魂をさいなむのだ。」そして彼自身、老年

2

b20
ところで、この知恵は制作的ではない。このことは、かつて最初に知恵を愛求した人々のことからみても明らかである。ただし、驚異することによって人間は、今日でもそうであるがあの最初の場合にもあのように、知恵を愛求し「哲学」始めたのである。ただしその初めには、ごく身近の不思議な事柄に驚異の念をいだき、それから少しずつ進んで遙かに大きな事象についても疑念をいだくようになったのである。たとえば、月の受ける諸相だの太陽や星の諸相だのについて、あるいはまた全宇宙の生成について。ところで、このように疑念をいだき驚異を感じる者は自分を無知な者だと考える。それゆえに、神話の愛好者もまた或る意味では知恵の愛求者「哲学者」である。というのは、神話が驚異さるべき不思議なこともからなっているからである。したがって、まさにただその無知から脱却せんがために知恵を愛求したの

訳例

第一問：プラトン『国家』藤沢令夫訳（岩波文庫 上巻）1980

第二問：アリストテレス『形而上学』出隆訳（岩波文庫 上巻）1956

哲学専攻 専攻 領域（博士前期/修士・博士後期・前後期共通）

試験科目：第 外国語（ ） / 専門科目（ 小論文 ）

試験時間：（ 60 ）分

（問題）以下の（A）（B）（C）の三つのテーマの内、いずれか一つを選択し、各自理解し考える内容を論述せよ。その際、1) 選択したテーマはどのような意味連関において捉えられるかを最初に記し、2) 哲学の営み自体の中に如何に位置づけられるかに論及し、3) これまでの自分の大学での学問上の経歴および専門と関係する点があれば言及し、最後に 4) そのテーマ自体について（自らが当大学院哲学専攻において究めてゆこうとする中心課題への展望も含めて）可能な限り徹底的に叙述するというプロセスを提示するようにして、2500字以上3000字以内で記述すること。

- （A）哲学的思考の発展にとっての、現代に相応しい教養との関係
- （B）倫理（および人間の生き方）について、哲学は何をどこまで言明することができるか
- （C）美と真理は乖離するのか或いは融和するのか

出題の狙い

哲学専攻の〈現代思想コース〉の受験科目の一つである小論文なので、大学院で哲学を専門として研究を深めてゆく上で、哲学的思考に密接に関与するテーマを論じてもらうことにした。上記の（A）（B）（C）の設問は、広い視点からではあるが、現代の精神状況においても哲学的に思索を営む上で中心的な問題（問いかけ）を受験志願者の関心の動向によって選択して叙述できるように設定している。

設問についての解答論述のポイント

- （A）について：教養としての（精神的）自己形成と、単に豊かな教養の陶冶とは差別化される上で哲学としての思惟の営みと発展に教養の培養がどのように関係し影響するのかを問うている。設問内での 1) はこのポイントに言及することが狙われているが、加えて「知」の在り方として今日の過剰な情報的知識やデータサイエンスに対する批判的反省といった省察的部分を挟んで、2) における〈哲学の営みそれ自体〉にとってこの設問のテーマがどのような意味／位置価値を有するのかへと叙述が展開することが望ましい。もちろん、哲学史においてこのテーマが主題的考究へと進んだ経緯を指摘できればさらに優れた叙述（19世紀初頭にイェナ期のヘーゲルにおける問題化やフッサール晩年の〈ヨーロッパ諸学、特に精神諸科学の危機〉の問題構制、またガダマーも縦横に論じた〈教養としての自己形成と哲学〉の主題）と

なり得るが、決して必要不可欠な要因ではない。また 3) の志願受験生のこれまでの学問上の経緯との関連については、特に人文学系の出身である場合には何らかの言及が可能であろうが、設問にあるように必ずしも必要ない。しかし、4) のポイントについては、今後自らが進もうとする専門領域をを巡っての問題意識とともに、大学院で哲学を専攻しこの時代を生きてゆく上で〈現代にふさわしい教養〉との関係についての考えを十分に述べる事が中心的要件である。

(B) について：倫理（生き方）と哲学的思惟（の在り方）は深く密接に関係するとともに、哲学のロゴスとしての言述様式とその論理性が具体的で歴史的な生（個としても何らかの集団としても）の只中から発生する問題脈絡にどこまで関与して実質内容的に倫理的な言明を為すことができるのかという、哲学の営為の自己反省的な問いであることを先ず設問内の 1) において指摘することが重要である。このような哲学の自己反省は、すでに古代ギリシャのアリストテレスの倫理学構想における〈実践へと向けられる知〉の純粋な理論知との峻別にも端を発しているが、19世紀末から20世紀に大いに展開された言語分析系のメタ倫理学を通しての道德言語特有の根本性格の追究と哲学的思惟の限界に布置することを背景とするが、設問の 2) では（問われている中心問題として）触れることができるかがポイントである。3) については、A) の設問と同じく、それぞれの受験生がこれまでの自分の大学での勉学内容や卒業論文を通して追究したテーマ内容から、もし関連して言及することがあれば述べるという程度で、必須ではない。4) の観点からは十分に論述してもらいたい。今日に〈学問（諸科学）の倫理〉といった形で問題化されるのとは全く異なった次元で、人間の生き方および倫理に哲学はどのようにどこまで肉迫できるのか、大学院で受験生各自が目ざす専門領域とテーマとも関連させて考察することが求められる。

(C) について：美と真理（ここでは善との関連は問われないが）という、西洋の長い伝統における最も根本的な哲学的探究を牽引してきた中心主題であることを先ず踏まえるならば、設問の 1) で哲学史での思想脈絡を通して〈真〉と〈美〉はどのように関係または相克し合う問題連関の展開を示してきたのかが問われることになる。この問いを診断および究明してゆくためには、哲学的思惟の根本体制が西洋の古代から中世を経て近代および 20 世紀以降の現代へと如何なる変遷の歴史的運命を辿ったのかを省察する視点が 設問中の 2) のポイントとなる。プラトン中期のイデア論的形而上学からの流れでは〈美〉のイデアは〈真〉の理念とどのように関係づけられるかは明確に論じられることなく、他方ではプラトンの代表作と言える対話篇『国家』第十巻で展開される劇作や（いわゆる亜流の）詩文芸批判からの影響作用史も相まって、『美と真理の乖離』という動向が哲学史の動向を刻印することになる。西欧近代美学の開拓期においても、バウムガルテンに見られるように理論的に厳密な学の規準とは異なった蓋然性（Wahrscheinlichkeit）を美学の成立基礎となる。カントでも美的判断力（趣味判断）と天才の議論は、厳密な認識上の意義は認められていない。このような近代美学の動向も、20 世紀中葉からの新しい芸術哲学上の思索を通してどのように超克されようとするのか、そしてその際

に現象学の流れと（ハイデガー以降のガダマーにも継承される）解釈学的哲学を通して〈真理〉の根源的理解と〈美〉への問いが新たに開かれる局面を背景として、〈真〉と〈美〉が融和する根源的土壌が開拓されてきている。

しかしながら以上のような哲学史における問題連関に叙述が言及する必要は全くなく、設問での 3) と 4) は現代の日常生活文化を取り巻く問題状況から、たとえばデジタル画像や情報上のイメージなどに関しても、〈真〉と〈美〉の関係がいかに関わり直されるかを論述できればよい。

哲学 専攻 領域（博士前期/修士・博士後期・前後期共通）

試験科目：第 外国語（ ） / 専門科目（ 哲学史 ）

試験時間：（ 60 ）分

問1

修士論文・博士論文で何をテーマにするにせよ、哲学研究の上では抑えておかななければならない、哲学史上の概念を出題している。関係の深い人物、学派、書名、時代、哲学史的意味に記し、明快な文章で記すことが求められている。

問2

1つの概念を選択し、哲学・思想の観点から、その史的展開の詳述を求める問である。選択については、回答者の研究テーマに沿ったものであることが好ましい。いずれの概念も、原語に遡りつつ解答を整える必要がある。

問1、問2とも、哲学史の知識の幅、思考と論述の正確さを確認する問である。解答例を提示するには馴染まない。